

上海・東亜同文書院

# メデイア人脈を考察する

—— 戦中・戦後の三つの「事件」から

飯田 いいた

和郎 かずお

(一般社団法人アジア調査会理事)

## 第2章 文化大革命報道における同文書院人脈

### 第3節 突然の命令 国外追放

それは突然の出来事だった。国外追放。海外駐在記者として是最も重い処分に、『毎日新聞』の北京特派員、江頭数馬（東亜同文書院第44期）は呆然とした。

江頭数馬は東亜同文書院の3学年先輩、高田富佐雄の後任として1967年4月、北京に赴任した。毎日新聞社は、第38期の新井宝雄から高田富佐雄、江頭数馬と3代続けて

同文書院OBを北京特派員に起用していた。文化大革命は高田の任期中から続く最大の取材テーマだ。だが、江頭は赴任から半年にも満たない同年9月10日、『サンケイ新聞』『西日本新聞』の記者とともに、国外追放を言い渡された。

第2章第1節では、現在の習近平政権が国家の安全、つまり習近平体制の安全を最優先に掲げ、国家情報の漏洩ろうじつ、彼らの指す「外国勢力の浸透」に水をも漏らさない強権姿勢で臨んでいることを説明した。警戒の矛先は中国に駐在

第5回

する外国人記者にも向けられている。第1節で紹介したように、中国外国人記者クラブ（FCCC）の報告書が、習近平政権が「当局が容認できない報道を排除する傾向が毛沢東時代並みに強まっている」とまとめた、その「毛沢東時代」の出来事を引き続き検証する。

とりわけ記者の国外追放という事態に向き合った東亜同文書院OBジャーナリストたちの姿を追ってみたい。まずは、追放の対象となった『毎日新聞』の江頭数馬のケースからみていく。

北京市内の中国外交部庁舎。出頭を命じられた江頭数馬は9月10日、外交部新聞司副司長、張芬彦にこのように告げられた。「ここで狂気のように、反中国活動を続けている一部の新聞と記者にもう一度警告する。すべて中国に反対する人によい結果はない。結局、偉大な毛主席のいわれたように石を上げて自分の足を打つだけである」「あなたたちとあなたたちを代表する新聞の一連の中国人民敵視の行為、一連のゆゆしい政治挑発は完全に廖承志・松村記者交換協定の精神にそむき、中日友好関係を大きく破壊した。このような記者が中国に残ることは絶対に許せない」。記者の追放は日中記者交換協定が結ばれて以来、初めてのことだった。

江頭数馬は翌日から数えて5日以内に中国を出るよう命じられた。この3社には後任記者の赴任を認めないという。

江頭は4日後の9月14日、帯同していた妻子とともに、北京から広州、香港経由で帰国の途に就く。北京を離れた機上での中を帰国後、振り返っている。

「これで見おさめね」。かたわらの妻がポツリと言った。北京発広州行き中国民航のバイカウント機上。服務員の毛沢東宣伝の踊りや歌が済んで4、50人の乗客もほっと息をついた。眼下には赤濁した揚子江をはさんで、果てしない湖沼の海原が広がっていた。二人の子供は無心に眠りこけている。私は「うん」と答えたが、振り向きもせず、窓の下に広がる自然に眼をすえたままだった。「あなたは北京駐在の記者ではありません」——中国外務省新聞司の係員から、こう冷たく申し渡され、造反のアラシのなかに放り出されて4日目。とにかく機上の人となった。あまりにも突然に、国外退去を言い渡され、毎日新聞北京支局をたたむのに精一杯だった。世界の注視を浴びた北京特派員から一転、特務（スパイ）と呼ばれかねないどん底に突き落とされ、不安もひとしおだった。しかし、この国を去るとなると、その山河に「さよなら」を言わずにはおれなかったのである。<sup>100</sup>

9月11日付の中国共産党機関紙『人民日報』には、3人（社）の追放理由が詳しく説明されている。

# 我外交部限令三名日本记者离开中国

## 这些记者追随佐藤政府反华激起我人民公愤

新华社十日讯 我国外交部新闻司负责人今天召见日本驻京的九名记者。正式宣布日本《每日新闻》、《产经新闻》和《东京新闻》三家报社的三名驻京记者，应在限期内离开中国。

新闻司负责人指出，日本佐藤内閣是日本历届内閣中最反动的内閣。它一贯追随美帝苏修，执行美苏反华反人民的反动政策。最近以来，佐藤更变本加厉，竟不顾中国人民、日本人民和亚洲人民的强烈反对，亲自出马，

同中国人民公开蒋介石集团加紧勾结。这是公然粗暴干涉我国的内政，公然与七亿中国人民为敌的严重的政治挑衅。

新闻司负责人又指出，上述三家报社和它们的驻京记者一直替反动的佐藤政府反共反华反人民的罪恶勾当摇旗呐喊，甚至不顾我们提出的严重警告，多次在报上刊登通讯和漫画，肆意恶毒地污蔑我国文化大革命，歪曲报道我国国内的情况，进行反华活动。特别令人不能容忍的是，他们竟然恶毒

地把手头指向全世界人民心中那轮红彤彤的紅太阳，我们崇敬敬爱的伟大領袖毛主席。中国人民对此表示万分愤慨。

新闻司负责人指出，他们的这种行径已严重地完全违背了廖承志、钱瑛两办事处交还记者协议的精神，大大地破坏了中日两国人民间的良好关系。为此，新闻司宣布，自即日起，取消上述三家报社记者在华采访的资格，限期离开中国。同时，目前我们将不考虑这三家报社派新记者来华的问题。

在北京访问和工作的修正主义集团！“钱无天不日本朋友们的七位代表和 钱的毛泽东思想万岁！”  
“全世界人民的伟大領袖毛主席万岁！万万岁！”

# 佐藤公然与中国人民为敌

## 在台湾同蒋匪帮密谈后回日本

新华社十日讯 美帝国主义的忠实走狗日本政府首相佐藤荣作，在台湾进行三天阴谋活动后，于九日乘“海晏丸”返日。据美帝国主义走狗美联社东京十日电，佐藤在返日途中，曾与美联社记者进行了两次秘密密谈。他在返回日本时发表的书面谈话中叫喊：“在亲切友好的气氛中”就日蒋关系、反共反苏反华反人民的“任务”、“使命”、日本教育佐藤政府，将继续加紧对我领土台湾进行政治、经济、文化侵略。

佐藤这次窜入我国领土台湾，明目张胆地与中国人民为敌，为美帝国主义制造“两个中国”的阴谋效劳。他同蒋匪帮头目严家淦、蒋经国、老蒋谈好何应钦等进行了广泛的勾结。

【图13】1967年9月11日『人民日报』5面

反動的な佐藤政府の反共、反中国、反人民の罪惡的悪事に大いに加担し、甚だしきに至っては、われわれの出した厳正な警告を無視して、新聞紙上に何回もニュースやマンガを掲載し、何はばかりとくなく、中国の文化大革命を中傷し、中国国内の状況をゆがめ、反中国の行動に出た。とくに我慢できないことはホコ先を全世界人民の心の中の赤い赤い太陽、われわれの最も最も敬愛する指導者毛沢東主席に向けていることである。われわれには絶対に許せないことだ。極めて憤慨に堪えない。

首相の佐藤榮作は、中国との今後の関係構築を考慮しながらも、台湾との関係断絶に踏み切れずにいた。「厳正な警告」とはなにを指すのか。国外追放通告に至る前兆は存在していた。この1967年2月、中国外交部は北京に駐在する日本記者団の幹事と『毎日新聞』の高田富佐雄を呼び、「最近の毎日紙面はしきりにマンガで偉大な毛主席と文革にあくどい攻撃をしかけた」と抗議している。

『毎日新聞』紙上では同年2月3日付夕刊と10日付夕刊の二度にわたって、毛沢東と目される男性を描いた漫画を掲載していた。

2作はいずれも『毎日新聞』を中心に、戦前から政治・時事漫画を描き続けてきた那須良輔の作品である。「火薬ダルの上の踊り」と題した3日付夕刊は、紅衛兵を鼓舞し



風吹けばジョンソンが喜ぶ

那須良輔

【図15】1967年3月10日  
『毎日新聞』夕刊4面



火薬ダルの上の踊り

那須良輔

【図14】1967年2月3日  
『毎日新聞』夕刊2面

ているのだろうか。人民帽に人民服姿、核ミサイルを背負った人物が火薬樽の上に立ち、両手に火のついたたいまつを振りかざす。いつ自らが爆死するかわからない危うさを描いている。

一方、10日付夕刊の漫画は2つのカットからなる。「文化大革命」と書かれたプラカードを手にした人物が、「ソ連」と記された背広の人物に襲い掛かっている。もう一つは、背の高い米国男性が2人の「北ベトナム ベトコン」兵士に対し「和平」を呼び掛けるポーズだ。「ベトコン」兵は銃を捨てている。「風吹けば桶屋が儲かる」のことわざを意識したのだろう、タイトルは「風吹けばジョンソンが喜ぶ」。泥沼のベトナム戦争が続いていた。北ベトナムを支援する中ソ両国が仲違いすれば、南ベトナム側の米国(ジョンソン大統領)を利するという意味合いだろう。

江頭数馬は「当時毛沢東主席をマンガにして紙面に掲載したことが、中共側を刺激していたので、毎日を含む在京の各紙が元首ならびに元首に相当する人物のマンガについては、国情の違いと国際的儀礼を特に配慮するようにしていた」<sup>181</sup>が、国外追放という最悪の結果に至るとは、だれも想像していなかった。

中国外交部は6月には日本人記者団に、「東京駐在の中国記者がさまざまな妨害、制限を受けており、これが続くなら対応措置をとる」と警告した。<sup>185</sup> 那須漫画の題材となっ

たのは、中ソ関係が「事実上、国交断絶の一步手前」というきわどいところまできていた<sup>186</sup>。同年1月25日、モスクワで発生した、赤の広場事件<sup>187</sup>が、「極限まで悪化させる直接のきっかけになった」<sup>188</sup>からだろう。

中国共産党機関紙『人民日報』は、赤の広場事件<sup>189</sup>発生直後の同月27日、「ソ連修正主義者のバカものたちの狂った挑発に痛撃をくらわせよう」「この血の債務は必ず支払わせる」という激しい言葉を使った社説を掲げた<sup>190</sup>。

これは2月3日朝刊掲載の『毎日新聞』社説が指摘するように「中共の文化大革命自体が、革命五十年を経たソ連の国内にみられる自由化現象などを『修正主義』として、今後、中国大陸に芽生えさせないようにするという、反ソ的色彩をもったものとみることができる」<sup>191</sup>からだ。

江頭数馬の国外退去命令は、中ソ対立から端を発し、日本のメディアにも波及した形だが、江頭は自身への処分<sup>192</sup>に国外追放について、2点の漫画掲載など『毎日新聞』だけに起因するものではなく、「佐藤首相の訪台に対する中国側のしっぺ返し<sup>193</sup>」と推測する。時の首相、佐藤栄作は追放命令直前の同月8日、中国側が強烈に反対するなか、台湾を訪問し、総統の蒋介石と会見していた。

前述のように、中国外交部はこの年の6月に、東京駐在の中国記者がさまざまな妨害、制限を受けているとして、対抗措置を示唆していた。これは第1節で紹介したように

2020年3月、外交部が米主要3紙の北京駐在の米国籍記者を国外退去処分とよく似ている。

この時は米国が在米中国メディア5社に対し、在米中国人スタッフの人数に上限を設けたことへの対抗措置だったが、まったく同種のしっぺ返しとも言ってもよいだろう。一部をスケープゴートにした報復措置は、今も中国外交の常套手段である。

江頭数馬は妻子3人とともに、広東省深圳から香港へ出国する。「この税関〔深圳：引用者注〕の取り調べで、中国の文化大革命が容易ならぬ事態にあることを、まざまざと感じた。税関吏は、私たちがカベ新聞を読んだことをひどくがめ、解放軍の動向を書いたことを根掘り葉掘り問いただした」<sup>194</sup>。中国外交部が3記者に命じた退去期限の最終日、9月15日のことだった。

『サンケイ新聞』、『西日本新聞』、『毎日新聞』の3社の中国駐在特派員は空白状態になった。国外退去は、日本国内で大きな問題になった。3社を含む全国の主要新聞社・放送局が加盟する日本新聞協会の編集部長、前田雄二は「駐在記者が、記者としての取材、報道活動をしている限りにおいては、その内容がどんなに一方的なものであると判断されても、とがめだてはさるべきではない。(略)新聞記者本来の活動であれば、報道、通信の自由を保障するのが協定の規定だというのが、日本側の見解である。この観点

からすれば、今回、中国のとった日本人3記者追放の措置は、きわめて奇異で、「協定の精神」にそむいたものという以外に言いようはない」と中国サイドを厳しく非難した。もちろん、業界団体である日本新聞協会の反応以上に、自社の特派員が追放処分になった当該3社は対応に追われることになる。

#### 第4節 追放処分への対応 想起させる竹槍事件

北京特派員の追放という知らせに、3社はどのような姿勢を示したのだろうか。毎日新聞社の例を見たい。江頭数馬と同じ東亜同文書院卒業生だった編集主幹、田中香苗の様子がわかる資料がある。田中が北京にいた江頭とその家族を案じる様子を、江頭は書き残している。退去期限まであと3日間、北京支局閉鎖に伴い、あわただしく整理に追われていた9月12日のことだ。

12日夕方、毎日新聞本社から国際電話が入る。「(東京も)万全の措置を取っている。田中編集主幹、枝松編集局長も心配している。早く出てきてほしい」<sup>184</sup>

当時、外信部長として江頭ら家族4人の帰国に向けた対応にあたっていた山内大介は「田中編集主幹が外信部長の私にただ一言『江頭君が無事脱出、帰国できるように全力

を挙げてくれ』とだけ言った」と記憶している。<sup>185</sup>

ここで第1章を振り返りたい。戦時下の1944年2月、『毎日新聞』は、「竹槍では間に合はぬ」との見出しとともに軍部を批判する記事を掲載した。のちに竹槍事件と呼ばれる紙面を決断したのは、吉岡文六である。竹槍事件から23年が経過し、同社の専務取締役兼編集主幹になっていた田中香苗は、かつて吉岡の直属の部下だった。竹槍事件当時、編集局長だった吉岡のもと、田中は東亜部長のポストにあった。2人は同じく東亜同文書院を卒業した先輩、後輩の関係であり、同じく毎日新聞社で、中国専門記者の道歩んできた。

『東亜同文書院大学史―創立八十周年記念誌―』の記述(無署名)は、「吉岡文六(第19期)の文章は大河のごとく、三池玄佐夫(第18期)のそれは湖水のごとく、それぞれ特徴があったというが、その両先輩の文風を受け継いだのが田中といわれる」<sup>186</sup>と評されるほど、田中は吉岡の影響を受けていた。ちなみに『東亜同文書院大学史―創立八十周年記念誌―』によると、三池玄佐夫は若山牧水の弟子で「虚谷」と号し、優れた歌人でもあった。「満洲事変当時の奉天特派員として多彩な名文の特電を放った」<sup>189</sup>とされる。東亜同文書院の同窓で1期後輩の吉岡と違ったタイプながら、三池も異彩のジャーナリストだった。

竹槍事件の責任を取る形で毎日新聞社を離れた吉岡文六



【図16】1965年4月30日  
『毎日新聞』朝刊1面

に、さかんに復職を求めたのも田中香苗だった。田中が吉岡から学んだのは、中国に関するさまざまな知識、取材手法、筆致だけであろうか。言論人として、どのように振る舞うか。竹槍事件における吉岡の態度を間近で見ていた田中にとって、吉岡が死去したあとも、吉岡は良き手本だったことは容易に想像できる。なにより、文化大革命の影響によって、部下が国外追放されるのは、田中自身が長くフィールドワークの場としてきた中国での出来事である。前述のとおり、田中は専務取締役という組織全体のリーダーでもあった。

その田中香苗が吉岡文六のリーダーシップを意識したと推測できる場面がある。ベトナム戦争さなかの1965年2月、米国は対峙する北ベトナムへの爆撃（北爆）を開始した。日本の報道各社は戦地へ記者、カメラマンを派遣するなど、米ソ両陣営の代理戦争を競って報じていた。

米国時間の同年4月29日、米議会上院の外交委員会において、ベトナム問題について開かれた同年4月7日の秘密聴聞会での証言記録が公表された。その証言記録には、米政府高官の驚くべき見解が含まれていた。ポール国務次官は『毎日新聞』を名指しし「その編集者の中には多数の共産主義者がおり、それで批判的な態度をとっているのだ」と非難していた。また、前駐日大使のマッカーサー国務次官補も「(毎日、朝日の)両新聞とも(共産主義者に)浸透されている」と証言したという。<sup>30)</sup>

いずれも、雨のように降る爆撃を受けた北ベトナムの惨状を日々、詳報し、北爆継続を非難する両新聞社の論調をやり玉に挙げたものだ。『毎日新聞』は即座に4月30日付朝刊の紙面上で、田中香苗・編集主幹名の談話を掲載し、米政府に抗議するとともに、責任ある説明を要求した。

われわれは日米の友好関係を悪化させたい気持ちはさらさない。真の友人間の理解の促進のためには善意の批判や忠告があってもいいはずである。米上院外交委員

会という権威の場でなされた米高官たちの証言内容は、毎日新聞社の編集権の権威に対する不そんな発言である。(略)編集方針が共産主義者に影響されているような事実にはたつては絶対でない。したがって米高官の証言内容は、日本の世論と国民に対する重大なる侮辱でもある。(略)米国の政策立案者たちがそのような薄弱な対日認識のもとに、アジア政策を進めることは憂慮すべきことといわねばなるまい。われわれは自由陣営の正しいアジア政策の遂行のために、国民の世論を公正に反映した新聞を作る方針をいささかもくずすものではない。そしてそれが真の日米間の友好と理解に役立つものであると信じている。<sup>201</sup>

田中香苗の談話において、「アジア政策」という単語が2回登場している。これは何を意味するだろうか。

田中香苗自身もジャーナリストとして経験した日中戦争、太平洋戦争、敗戦を経て、日本は生まれ変わった。そして米国を中心とする西側陣営の一員になった。戦時下に言論統制を強いられた日本のジャーナリズムも「言論の自由」をどの国より大切にするように生まれ変わった。日本の最大の守護者は米国であり、日本のジャーナリズムも日米安保体制の重要性を理解している。田中は談話でこう訴えたのだらう。そうであるのに、「日本の世論と国民に対

する重大な侮辱」となる証言を行ったのは、ほかでもない米政府の高官ではないか。そのような「薄弱な対日認識」の上に立つて今後、中国を含むアジア政策が遂行できるのか。田中にはそんな憤りがあふれた。

同じく「共産主義者に浸透された」と名指しされたもう一方の朝日新聞社は、『毎日新聞』と同じ30日朝刊に「事実無根のマ証言」とのタイトルで「鈴木朝日新聞東京本社編集局長談話」を載せるも、それは第2面で2段見出し。専務取締役を兼ねた編集主幹、田中の名で抗議した『毎日新聞』とはランクも、即座に1面に大面積を使つての抗議談話を出す姿勢も、その違いを浮き彫りにした。

これら日本メディアの猛反発の影響もあつてのことだろう。米國務省スポークスマンは米國時間の翌30日、「日本の主要新聞が現在、偏向したニュースを流しているとか、共産主義者によつて支配されているというのは、米政府の責任ある政府当局者の見解ではない」との声明を出した。<sup>202</sup>事実上の訂正である。軍配は『毎日新聞』、そして田中香苗が上がった。

米國を相手に猛然と抗議する田中香苗の姿勢は、竹槍事件で吉岡が軍部に対して貫いた態度に通じる。前出の田中談話にあるように、「真の友人間の理解の促進のためには善意の批判や忠告があつてもいいはず」なのは、その相手を米國から中国に代えても変わらない。



それは、以下に述べるように、江頭数馬の国外追放処分後に下した田中香苗の判断に表れることになる。編集主幹談話にある「それが真の日米間の友好と理解に役立つ」との信念は、「日米間」を、今度は「日中間」に置き換えて文化大革命報道にあてはめられる。

文化大革命時に場面を戻そう。田中香苗は、国外追放となつた江頭数馬とその家族3人の身を案じる一方、中国当局による処分に激怒していた。田中に仕える編集局長だった枝松茂之は回顧する。「『とにかく追放の理由を聞き質せ。記者協定「日中記者交換協定：引用者注」の世話をしている古井を通じて周恩来に断乎たる抗議を出せ』と私に命じた」。田中は、日中間に正式な外交関係がないこのころ、日本と中国のそれぞれの政治家同士のパイプであった古井喜実、それに首相の周恩来を使つても、納得する回答を求めた。宮森喜久二によると、田中は「『退去の理由、それに対するこちらの言い分、それを話し合つてこそ日中真の友好が生まれて来るのである』というのがその精神で、(略)揉み手、平身低頭の態度を厳に慎むよう指示した」。『毎日新聞』は日本人記者3人の国外退去に対し、9月20日付朝刊の社説で次のように主張を展開した。

毎日新聞はじめ戦後の日本の一般新聞が、自由な新聞としてあらゆる権力から独立し、いやしくも政府の代

弁者<sup>206</sup>などでないことは内外に知られるとおりである。まして政府の反中国行為を「吹聴」するような意図はさらさらないのであり、北京の外交当局が非難するような事由はまったく心外というほかはない<sup>208</sup>。

新聞社説は複数の論説委員が協議しながら、その論調をまとめ上げる。そして、それら協議内容に沿って担当論説委員が執筆するが、当然ながら、この時は編集部門の最高責任者である編集主幹・田中香苗の目を通っている。このような田中の方針は、前述の米国による北爆時に、米國務省に対して行つた抗議に相似している。さらに、ここまで貫いた田中のスタンスには、自身が知り尽くした中国での経験も加味されていた。枝松茂之は田中がこのように話したのを記憶している。

田中さんは一貫して言っていた。「自分の長い経験からして、中国人は何でもベコベコするような日本人を決して尊敬しない。少々痛いことであっても本当のことを言う者を肚では尊敬するものだ。戦前戦中にはいわずに買弁<sup>マイベン</sup>と称する中国人がいて、日本の出先にお世辞を使つてうまい汁を吸っていた。この連中を使うと便利に違いない。けれども誰も本気で彼らを尊敬しなかった。立場が変わっても同じことだよ<sup>209</sup>」。

「買弁」とは清代の1800年代から1940年代にかけて、対中進出を加速させる欧米列強の資本に取り入った中国商人のこと。そこから転じて中国人でありながら自国の利益を損なうような行為や人物を指す。

田中香苗も東亜同文書院時代から、さまざまな場面で、さまざまな中国人を観察し続けてきた。中国人にどのように接すれば、尊敬を得て真の信頼関係を構築できるのか。感情のみによって反発するのではない。中国を熟知するがゆえの計算は、次の指示からも見て取れる。

宮森喜久二が記憶していたように「採み手、平身低頭の態度を厳に慎むよう指示した」田中は決断する。「退去命令を受けない社の記事が採み手かつ唯唯諾諾たる無性格なものなので、かかる記事しか書けない環境なら特派員を置く必要はない」と。

北京に残留するため、文化大革命への批判の矛を取めたような記事を書く社も、同じ日本のメディアの中にはあった。中国に対して友好的か否か。中国側が今日に至るまで、多用する「友好的」というフレーズは、中国当局が外国メディアを選別するための枠<sup>はかり</sup>であり、「友好的」な報道とは、時として中国側の意図に沿った報道を意味する。

さまざまな理由で外国メディアへの国外追放は続く。中国に常駐する日本の報道機関は、記者交換協定で常駐が認められた9社のうち、『サンケイ新聞』、『西日本新聞』、『毎

日新聞』の3社に続いて追放、また駐在記者証が更新されず、北京に残れたのは朝日新聞社1社になった。『朝日新聞』の北京特派員、秋岡家栄はのちに自著の中で、1970年10月の出来事を記しながら「北京に赴任して満三年目のことであった。NHK記者の再入国拒否、共同通信支局閉鎖のあとをうけて、北京における日本人特派員は私人になっていった」と回想している。

では、その当時の『朝日新聞』の中国報道は、田中の言う「採み手かつ唯唯諾諾たる無性格なもの」だったのだろうか。日本新聞協会は1971年10月、「揺れ動く世界と新聞報道」と題して討論会を開催した。学者3人に加え、『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』から編集幹部が出席し計6人によって議論している。テーマは「流動化する国際情勢とメディアの在り方について」。幾分、下火になったとはいえ、文化大革命はまだ続いていた。この模様は、日本新聞協会が発行する『新聞研究』1972年1月号に詳報されている。『朝日新聞』の論説主幹、江幡清は自社の立場をこう主張した。

基本的に戦争状態にあり、国交が回復されていないことがおのずから制約になっている。そうした場合の日本の新聞のあり方としては、とくに現地の記者の場合、極端にいえば、現実に中国のなかで何が進行しているのか、

歴史の証人として継続的に見ているだけでもよろしいといえる。それでも日中関係の将来の長い友好関係を築き上げる上に役に立つだろうということです。<sup>212</sup>

これに対し、中国政治を専門とする東京外国語大助教授、中島嶺雄は疑問を投げかける。

新聞の中国報道の困難性は十分に認めるのです。ただ日本にとって中国の姿をリアルにつかむことは非常に重要で、ことに国交を回復しなければいけないこの時期においてはおおさらです。そういうことになると、江幡さんが言われたとにかく北京にいるということの意味はどれほどの意義を見出し得るか。最近の状況を見てみると、みずから自分の手足をしばるような傾向が非常に強いのではないか。(略) 中国報道の信頼性が非常にこなわれるのではないかという気がする。<sup>213</sup>

『東亜同文書院大学史―創立八十周年記念誌―』が田中香苗のプロフィールを紹介した記述(無署名)によると、「戦後の日中関係でも、中国と日本を愛する立場から筋を通して、いわゆる『土下座報道』を排する襟度(きんんど)を厳しく護り通した」<sup>214</sup> 田中の信念は、「真実を伝えることこそ中国に対する真の愛情と信じていたからである。文革の波の高まりの

中でも彼は本当のことを言う新聞づくりをかたくなまでに守った」ことだと言えよう。<sup>215</sup>

田中香苗の「中国に対する真の愛情」とは何か。宮森喜久二によると、「田中の中国観について触れると、(略)基本は中国の国家民族を尊重し、庶民の生活に多分の愛情を抱き、それが一貫して失われていなかったたのである」<sup>216</sup>。その源流はやはり、東亜同文書院での学生時代であり、その後新聞記者として、国際関係を見据えながら、積み重ねられたのではないか。

報道人としての良識。田中はそれを重んじた。田中は毎日新聞社の専務取締役から会長となっていた1968年10月、同じく日本新聞協会が呼びかけた研究会談会に出席している。テーマは「社会変動下における客観報道」。『新聞研究』の同年12月号にその内容が掲載されている。

われわれの新聞にとって最も重要なのは、『公正の原則』である。それでは何が『公正』であるのか。(略) 日本長い発達史の中で、『不偏不党』『中道主義』という共通の原則を生み出した。これが『公正』の原則であり、『客観報道』の原理ともなっていることはご存じのとおりである。『中道主義』というのは、山と山の間の谷間を歩くとか、加えて二で割る、といった単純なものではない。それに左右に偏せず、あらゆる圧力に抗して、

谷間ならぬ峰の頂角をいくような、けわしい戦いを意味する。(略)これは、新聞報道ないし新聞づくりに処する、心のワクともいふべきであり、価値判断の基準となるものであつて、良識といいかえてもいい。かりにもし、この中道主義が新聞人の恣意や独善であるならば、それは新聞の自殺行為であり、読者の批判に耐えうるはずはない。われわれはこの点に自信をもちたいと思う。それでは良識とは何か、ということだが、(略)少なくとも、健全な常識のある者ならだれでも、その時、その問題について「公平」ないし、「公正」と考える目安があるはずだ。これが良識だろうと思う。<sup>217</sup>

この考え方は、東亜同文書院の先輩であり、卒業後進んだ毎日新聞社での上司でもある吉岡文六が竹槍事件で下した決断にも通じる。中道という名前から連想させる「どっちつかず」ではなく、「あらゆる圧力に抗して、谷間ならぬ峰の頂角をいくような、けわしい戦い」を意味する。

田中香苗は敗戦から4年が経った1949年、若年層向けに『新聞と新聞記者』と題した本を書いている。比較的平易な文章が並ぶ。「新聞社は、何ものにも、制限されずに、自由に記事を書く——これが報道の自由で、この自由がないかぎり、正しい報道をすることが出来ないのです。太平洋戦争中、日本の新聞社は、報道の自由を持ち得なかつた

のです。当時の軍部や政府はいろんな法規や命令で、新聞社をしばりあげていたので。それは国民のためを思う新聞記者にとつて何よりも残念なことでした」。<sup>218</sup> ペンを取り、原稿用紙に向かいながら、竹槍事件を、また吉岡文六の苦渋を回想していたに違いない。東亜同文書院に発したジャーナリズム精神は、文化大革命報道や、その渦中の追放劇を通じて、系譜となつて生きていたのではないか。

田中香苗は毎日新聞社の一線を退いたのち、同社が設立に深く関与した一般社団法人・アジア調査会の副会長となる。アジア調査会で約7年間、秘書として田中に仕えた海藤ユキ子は論者のインタビュールに対し「田中さんにとって、常に中国に対する思いを抑えがたかつた。本人にとつて、まさに青春そのもの。肌感覚の中国を大切にしていた」と語る一方、四人組が跋扈する中国を指し「『つまらない。あんな中国には行きたくない。見たくない』と繰り返し言っていた」と証言する。<sup>219</sup>

中国に共産党政権が成立して以降、日本社会を熱病のような中国礼賛が包み込んだ。ただ、田中香苗はそれに同調しなかつた。前出の山内大介は、田中の中国観について「イデオロギーや利害関係に判断基準を置いた中国観ではなく、中国社会の本質ともいふべき封建性、停滞性、後進性に同情を寄せる一方で、ナシヨナリズムの高揚を高く評価する」という柔軟な視点だった」と記している。<sup>220</sup>



飯田 和郎（いいだ・かずお）氏

1960年生まれ。関西学院大学経済学部卒業後、1983年毎日新聞社入社。佐賀支局、西部本社報道部を経て91年に東京本社外信部。北京特派員、台北支局長、中国総局長（北京）、外信部長など。2013年RKB毎日放送（本社・福岡市）に移り、報道制作センター長、専務取締役などを務めたのち23年に退職。在職中から福岡市の西南学院大学院国際文化研究科修士課程に通い、本稿を修士論文として提出（『アジア時報』用に改題）、24年3月修了した。一般社団法人アジア調査会理事。

中国はイデオロギーがすべてに優先し、田中香苗の原点である東亜同文書院の学生時代、その後の記者時代とまったく異なる国になってしまった。そのような認識を持つことができたのは、田中が中国の本質をしっかりと捉えていたからだ。それが文革時における記者追放劇での対応にも表れていた。そんな中国を、田中は改革・開放政策が動き始めた1981年まで訪問しなかつた。

この第2章冒頭で紹介したように、中国で駐在する外国人記者は、時に国外追放に遭い、そうならなくても、取材への妨害など他の国にはな

い息苦しさを感じながら、記者活動を続けている。中国外国人記者クラブ（FCCC）が報告書で「当局が容認できない報道を排除する傾向が毛沢東時代並みに強まっている」今日こそ、文化大革命時に中国側が行った外国人記者への処分から、学ぶものは少なくないのではないだろうか。田中香苗が生涯を通じて得た中国に対する知識と経験は、次の機会に活かされていく。柔軟でありながら批判を失わぬ冷静な中国観察眼は、日中国交正常化に至る過程で活かされていく。それは第3章で取り上げる。

178 現在、題字は『産経新聞』と改名。

179 江頭数馬『北京を追われて』（毎日新聞社、1967年11月）18頁。

180 前掲、江頭数馬『北京を追われて』、まえがき。

181 （無署名）「我外交部限令三名日本記者离开中国」（『新华社』、1967年9月10日）『人民日报』には翌11日5面に掲載された。

182 1901-1975年。山口県出身。旧鉄道省官僚から政界へ転出、郵

政相、建設相などを経て、1964年11月から72年6月の7年半、首相を務める長期政権を維持した。日本人記者3人の中国追放時の首相だった。アジアの平和への貢献を理由に74年、日本人として初めてノーベル平和賞を受賞した。

183 福原亮一「文革に翻弄された記者交換」（『日本記者クラブ会報』、日本記者クラブ、2008年6月、第460号）4頁。

- 184 前掲、江頭数馬『北京を追われて』16頁。
- 185 同前、17頁。
- 186 (無署名)「社説 陰悪化する中ソ関係」(『毎日新聞』、1967年2月3日朝刊)5面。
- 187 バリから引き揚げる途中の69人の中国人留學生がモスクワのレーニン廟入口で毛沢東語録を読みあげて参観人の邪魔をしたため、ソ連警察が取り押さえようとし、こざり合いとなった事件。中国外交部によると、中国人学生30数人がなぐられ、けがをしたとしている。1967年2月3日付『毎日新聞』朝刊1面の記事は、この出来事を、赤の広場事件として、ダブルミニュート付きで表現しており、本稿もそれに合わせた。
- 188 (無署名)「断交寸前の中ソ関係 ソ連、一応冷静に対処 国境厳戒、予断を許さず」(『毎日新聞』、1967年2月3日朝刊)1面。
- 189 (無署名)「社論 痛击苏修混蛋们的疯狂挑衅！」(『人民日報』、1967年1月27日)1面。
- 190 前掲、(無署名)「断交寸前の中ソ関係 ソ連、一応冷静に対処 国境厳戒、予断を許さず」(『毎日新聞』、1967年2月3日朝刊)1面。
- 191 前掲、江頭数馬『北京を追われて』163頁。
- 192 同前、34頁。
- 193 前田雄二「奇異な三記者追放の理由―日中記者交換協定の精神について―」(『新聞研究』、日本新聞協会、第196号、1967年11月)48、49頁。
- 194 前掲、江頭数馬『北京を追われて』29頁。
- 195 前掲、山内大介「刊行の辞」(『回顧 田中香苗』) 33頁。
- 196 (無署名)「各界における同窓の活動」(前掲、『東亜同文書院大学史―創立八十周年記念誌―』293頁。
- 197 1899-1945年、福岡県生まれ。東亜同文書院第18期。毎日新聞記者として大連、奉天、北京、新京、上海など中国各地で活動。フィリピン・ルソン島で戦病死した。
- 198 1885-1928年、宮崎県生まれ。本名繁。歌人。尾上柴舟に師事。「創作」刊行。旅と酒を愛し、平明な歌風により自然主義歌人として活躍した。著「海の声」「別離」「死か芸術か」「山桜の歌」など。
- 199 前掲、(無署名)「各界における同窓の活動」(『東亜同文書院大学史―創立八十周年記念誌―』293頁。
- 200 波多野裕造「米国務次官ら不当な証言 毎日、朝日両紙を非難」(『毎日新聞』、1965年4月30日朝刊)1面。
- 201 田中香苗「アジアで正しい政策を 田中毎日新聞編集主幹談話」(前掲、『毎日新聞』、1965年4月30日朝刊)1面。
- 202 (無署名)「事実無根のマ証言」(『朝日新聞』、1965年4月30日朝刊)2面。「マ証言」とは米国の前駐日大使のマッカーサー国務次官補の証言を意味する。
- 203 ロイター共同「毎日、朝日批判の上院委証言 米政府見解ではない 国務省声明 数年前のこと」(『毎日新聞』、1965年5月1日朝刊)1面。
- 204 枝松茂之「編集主幹の見識 対中早乘りに慎重さ」(前掲、『回顧 田中香苗』)256頁。
- 205 1903年-1995年、鳥取県出身。戦前の内務省官僚から戦後は衆

- 院議員に転じた。中国と太いパイプを持ち、日中記者交換協定の実現や、1972年の日中国交正常化にも尽力した。
- 206 1898-1976年、中国の政治家。日本に留学後、天津で「五・四運動」に参加。のち、パリ留学中に中国共産党フランス支部を組織。第二次大戦中は国共合作・抗日統一戦線結成に活躍。中華人民共和国成立後は首相として敏腕を振るつた。
- 207 宮森喜久二「評伝」(前掲、『回顧 田中香苗』) 91頁。
- 208 (無署名)「社説 北京の日本記者退去処分」(『毎日新聞』、1967年9月20日朝刊) 5頁。
- 209 前掲、枝松茂之「編集主幹の見識 対中早乗りには慎重さ」(『回顧 田中香苗』) 258頁。
- 210 前掲、宮森喜久二「評伝」(『回顧 田中香苗』) 91頁。
- 211 秋岡家栄『北京特派員 文化大革命から日中国交回復まで』(朝日新聞社、1973年8月) 198頁。
- 212 江幡清「揺れ動く世界と新聞報道」(『新聞研究』、日本新聞協会、第246号、1972年1月) 12頁。
- 213 中島嶺雄「揺れ動く世界と新聞報道」(前掲、『新聞研究』、第246号、1972年1月) 12頁。
- 214 前掲、(無署名)「各界における同窓の活動」(『東亜同文書院大学史』創立八十周年記念誌) 294頁。
- 215 同前、294頁。
- 216 前掲、宮森喜久二「評伝」(『回顧 田中香苗』) 87頁。
- 217 田中香苗「社会変動下における客観報道」(『新聞研究』、日本新聞協会、
- 218 1968年12月号通巻第209号) 9頁。
- 219 田中香苗『新聞と新聞記者』(翰林書院、1949年11月) 18頁。
- 220 前掲、山内大介「刊行の辞」(『回顧 田中香苗』) v頁。
- 220 インタビューより。